

第6回 基礎ぐい工事問題に関する対策委員会
議事要旨

日時：平成27年12月25日（金）15:30～16:20

場所：合同庁舎3号館4階幹部会議室

■ 議事

○中間とりまとめ報告書案について議論。

■ 各委員からの発言（本委員会の活動を通じての所感等）

- 建設業界では、基礎ぐい以外にも様々な問題が生じている。建設業法が制定されてから約50年が経過し、制度面の疲労が発生している。構造的な課題の解決に取り組むためには、建設業法の改正も視野に入れた検討が必要ではないか。
- 海外の建設業と比較しても、日本の請負契約の仕組みは特異な面があり、国際的にはもっと様々な形態での発注・契約が行なわれている。次世代を担う若い人たちに理解してもらうためにも、また、建設生産システムの発展のためにも、抜本的な検討が必要ではないかと思われる。
- 人間は必ずミスをする。一方で機械も万全ではない。安全を確保するためには、人と機械のどちらを優先するというだけではなく、それぞれの得意分野を取り入れて、両者があいまって安全を構築していくという意識が必要。
- 他方で、今回の問題の発端ともなった電流計は、古い技術のものとの印象を受けた。建設分野における機器の高度化にも期待したい。
- 熟練の技能労働者が減少していく中で生じ得る問題が、今回の基礎ぐいの問題に集約されて出てきた感がある。今までは真面目な職人が何とかしてくれたため、無意識のうちに個人の技量に甘えてきた構造が建設業界にはあるのではないか。手抜きではなく、技量不足による無意識で生じる事故ほど恐ろしいものはない。
- 建設業界では労働法令上必ずしも適切とは言えない人材の処遇等が慣習的に行なわれているという課題もある。
- このような不適切な慣習等の課題解決を今後とも業界に強く訴えていきたい。
- データの流用は、建設業界全体の信用を失う行為である。その一方で、大半の者が誠実に仕事に取り組んでいる。不誠実な者を基準にして厳しい対策を立てると、誠実な者まで対応に苦しむことになることは、今回の再発防止策の検討において悩ましいところであった。
- 今回の事案では、建設業における自由競争とは何か考えさせられた。これまでの会

議でも述べてきたが、工事の発注のなかで価格競争すべきではない事項もある。競争すべき事項と競争すべきでない事項を区別して、ルールを守っている者が勝つ公正な競争を前提とした環境を作っていくべき。今後の施策に期待したい。

- 横浜の事案ではマンションが傾斜した原因が未究明であることから、横浜市を中心に、早期の原因究明を期待する。
- 今回とりまとめた報告書の再発防止策が実行されることによって、基礎ぐい工事がしっかりと改善されることを期待する。

- 建設業の生産物は高額な財産であり、市場で取引される商品でもある。安心して取引ができるよう、商品としての品質管理の徹底が必要。
- 安心・安全を確保するためには、科学的な手法による新たなリスク管理の仕組みも検討する必要があるのではないか。
- 今後、建設業がコンプライアンスを遵守するとともに、適正な競争力を有し、働き甲斐のある業界に成長していくことを期待したい。また、社会全般をはじめ、建築物の使用者、取引関係者などに対してもわかりやすい情報提供が行われるよう、業界団体、個社、国による情報発信・説明にも期待する。

- 建設業界は、今回の件を基礎ぐいの問題としてのみならず、工事の品質確保の問題と捉えて考えるべき。
- 現在も現場での作業結果は複数の目でチェックすることになっているが、どこかに限界が生じる可能性がある。それに対応するには、(個人ではなく)システムとして工事をチェックすることを可能にする仕組みが必要である。例えば、情報をオープンにして、誰が生産したのかを広く分かるようにする取組も必要ではなかろうか。
- 今回の事案では、現場の実態や建設業が抱える構造的な問題が明らかになった。重層下請構造の実態把握などを進めつつ、将来に向けた検討が必要である。欧州では「リーン・コンストラクション」という取組が行われている。リーンにはスリム、引き締まった状態との意味がある。日本の建設業においても、人口が減少していく中でも安心してものづくりに取り組める新しい生産システムを作っていく必要がある。

- 再発防止策に関して、業界団体がかなり頑張っ具体的対策を取りまとめたことに感謝したい。
- 今回は基礎ぐいに関する事案であったことから、基礎ぐい工事に特化した対策をとりまとめたが、他の工事分野においても問題が発生する前に業界自ら議論して課題を洗い出し、対策を講じていく活動が進むことを期待したい。そのような活動を通じて建設業界全体が更に健全化されるものとする。
- 建築物・建造物は作り手が長期間の責任を負わなければならない。業界全体として責任感が求められるとともに、それだけ誇りのある仕事であることも自覚して、ものづくりに臨んでほしい。

■ 中間とりまとめ報告書は原案どおり決定された。